

# 全世界の7割が被害

## 市庁舎やJR駅舎も

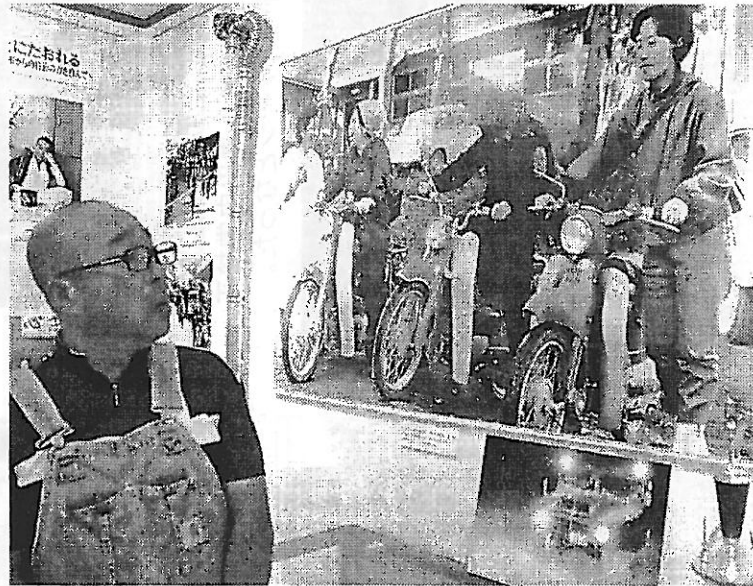
3月11日、マグニチュード9.0の東北地方太平洋沖地震が引き起こした大津波によって市中心部は市庁舎もろとも壊滅し、市の全世界中の7割以上が被害を受けた。また、市域にあるJR東日本の5駅のうち4駅（大船渡線の竹駒駅・陸前高田駅・脇ノ沢駅・小友駅）は、周辺地域の多くの駅同様、駅舎などが流失し、線路も大きな被害を受けた。

4ヶ月が経過して、消えた街並みの後片付けも大分進んだが、がれきの山はなお随所に見られ、復旧にはまだ時間が必要だ。



一瞬にして陸前高田市街のすべてを呑み込んだ津波の爪あと。(6月28日撮影)

# 46年前の恩 陸前高田へ



支援活動を主催する佐々木孝道さんと保健婦時代の千田和可さん(写真右端)＝西和賀町の深沢晟雄資料館

# 「救援苗」受けた旧沢内村民、あす炊き出し

1960年に全国に先駆けて老人医療費無料化に踏みきり、「生命尊重の行政」で知られた旧沢内村(現西和賀町)の住民有志が10日、陸前高田市で炊き出しなどの支援活動をする。半世紀前の異常気象の際に届いた4千束の「救援苗」に対する返礼の気持ちを込める。

主催するのは西和賀町のNPO法人「深沢晟雄の会」。老人医療を無料化した深沢・旧沢内村長を顕彰する活動をしている。10日は陸前高田・横田中学校に建てられた仮設住宅で、被災者に西和賀特産のワラビやイワナを振る舞い、民謡や創作太鼓を公演する。

## 「生きる希望もらったお返し」

旧沢内村は64、65年の冬、豪雪に見舞われた。春になっても低温続きで苗が育たず、田植えができないう状態になった。この時、陸前高田市から「沢内の農民を救おう」と、4千束の苗が届けられたという。

深沢晟雄の会の副理事長の佐々木孝道さん(55)は「65年は1月に深沢村長が現職で急逝した年。異常気象は悲しみに追い打ちをかけただけに、救援苗は村民に生きる希望と勇気を与えてくれた。今度は、お返しをする番」と話す。

今回の支援活動の仲立ちをしたのが、陸前高田の千田和可さん(69)。千田さんは65年から4年間、旧沢内村の保健婦として、地域医療のモデルとされた「沢内方式」を支えた。夫を津波で亡くし、仮設住宅に住む千田さんは「沢内で保健に携わったことは私の誇り。命の尊さを改めて確認し合う催しにした」と語っている。

(但木 汎)